

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	岸 彩子
論文題目	フランス語の直説法現在形の意味論 - 様々な意味を生み出す解釈のメカニズム		
（論文内容の要旨） 本論文はフランス語の時制研究で、特に直説法現在形を扱ったものである。直説法現在形は形態的には単純でありながら、発話現在 <i>Tiens, il vient.</i> 「ほら、彼が来る」、近過去 <i>Je reviens de vacances.</i> 「私は休暇から戻ったところだ」、近未来 <i>Je reviens dans trois jours.</i> 「私は三日後に戻る」、無時間的真理 <i>L'eau gèle à zéro degré.</i> 「水は零度で凍る」など、さまざまな意味を表す。本論文はこれらの用法を統一的に説明する原理を考究している。 第1章では先行研究を批判的に検討し、本論文の仮説を述べている。先行研究には、現在形は発話現在を表すという現在時説、話し手が視点を置く時点と同時の事態を表すとする同時性説、形態自体には時間性がないとする非時間性説がある。ところがこれらの説はいずれも説明できない現象があるという問題点を孕んでいる。本論文では非時間性説に立脚し、現在形は出来事の成立を表すが、その出来事は特定の時点に定位されず、意味解釈にあたって参照される解釈領域によって時間軸上に定位されるという仮説を提案し、非時間性説の難点を克服しようとしている。 第2章では過去の出来事を表す現在形の用法を考察している。従来から現在形は近過去の出来事を表すことができるが、<i>hier</i> 「昨日」のような時間副詞と共に起しないことが知られている。また時間副詞を前置すると容認度が上がるが、文ひとつではやや座りが悪い。本章ではこのような事実を説明するために、解釈領域という概念を導入する。解釈領域とは、文の意味解釈にあたって参照される限定された時空間のことである。すべての文はある解釈領域と相対的に意味解釈される。また解釈領域には2種類あるとする。特定の時空間を表す<i>t</i>領域と、時空間的限定のない非<i>t</i>領域である。<i>t</i>領域で解釈される出来事は、局所的な時空間に生起し、知覚の及ぶ限定された時空間内で把握可能なものである。一方、非<i>t</i>領域を参照する出来事は、特定の時空間を超えるもので、本論文では知識情報を表す抽象的な場とされている。<i>Paul fume.</i> が<i>t</i>領域で解釈されれば「ポールは今煙草を吸っている」が得られ、非<i>t</i>領域で解釈されれば「ポールはスモーカーだ」という意味になる。<i>*Il vient hier.</i> 「彼は昨日来る」（*印は非文を表す）が容認されないのは、過去の出来事読みされるためには過去時点で<i>t</i>領域を限定する知覚主体が必要になるが、直示表現である<i>hier</i>は話し手が発話現在に視点を置く必要があり、このふたつの要請が矛盾するためだと説明される。また<i>hier</i>を前置すると容認度が向上するのは、それによって大きな談話主題が設定され、そのもとで後続する現在形の文が非<i>t</i>領域を参照する知識表現となるからだと説明される。 第3章はスポーツ中継などで用いられる中継の現在形を扱っている。中継の現在形は形態的には未完了でありながら意味的には完了を表し、また <i>quand</i> 「～の時」などの接続詞と共に起しないという特異性を示す。本章では、中継の現在形では<i>t</i>領域が出来事ひとつ分にまで狭められており、話し手は発話現在において眼前に生起する出来事を知覚情報として述べているとする。現在形自体は非時間的なものであるが、解釈時に参照される<i>t</i>領域が現実の時間と類像的に結びつけられることによって時間が進行し、その結			

果、現在形が完了的に解釈される。小説などにおける語りの現在形は基本的に中継の現在形と同じメカニズムに基づいており、同じように完了的に解釈される。これに対して歴史的現在や粗筋の現在形は非t領域で解釈される知識情報であり、語りの現在形とは本質的に異なるものだとしている。

第4章は未来を表す現在形を扱っている。先行研究ではこの用法は確定的な近未来を表すとされることが多いが、本章ではまずこの用法は非t領域で解釈される知識情報を表すとしたうえで、知識情報を2種類に分類している。特定の主体(多くの場合話し手)の判断を表す情報と、共有された情報である。未来を表す現在形においては、大テーマとしての未来が文脈的に設定され、それが非t領域を構成し、現在形は共有された知識情報を表すとする。こう考えることによって、souvent「しばしば」やun jour「いつか」のような意味的に不確定な時間副詞が未来を表す現在形と共起できないことを説明できる。また過去を表す現在形とは異なり、未来を表す現在形は Il vient demain.「彼は明日来る」のように未来時点を示す時間副詞と共起する。しかし未来という大テーマが文脈的に設定された環境において知識情報を表すこの用法では、副詞demain「明日」は本来の直示的価値を失っていると考えられる。

最後に結論で本論文の主張するところをまとめて、その言語学における意義と残された課題を述べている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文はフランス語の時制研究で、特に直説法現在形を分析したものである。フランス語は時制の豊富な言語で、その研究の歴史も長く先行研究も数多い。直説法現在形はその名の示すとおり、現在、すなわち発話時に進行中の出来事を表すが、その他に、近過去・近未来・習慣的事態・時間に関係しない普遍的真理など、さまざまな意味を持つ。このように多様な用法を説明するために従来の研究では、現在形は発話現在を表すという現在時説の他に、話し手が視点を置く時点と同時の事態を表すとする同時性説、現在形の形態自体に時間性はないとする非時間性説など、いくつかの仮説が提案されてきた。しかし、これらの説にはそれぞれうまく説明することができない事例が存在するという難点がある。本論文は非時間性説を支持し、その上で今まで問題とされてきた諸点を統一的に説明しようとした意欲的論考である。

本論文の中核をなす仮説は、第2章で提示された解釈領域という操作概念である。この概念は Recanatiの *domain of discourse*、Canningsの *domain of relevance* をさらに展開したもので、その骨子は、文の意味解釈はその統語構造および部分の意味の結合によって完全に得られるものではなく、解釈領域を参照することで決定されるというものである。さらに本論文では解釈領域を2種類に分類している。局所的な時空間からなるt領域と、無時間的な知識空間である非t領域である。Paul fume.をt領域で解釈すると「ポールは(発話時現在の今)煙草を吸っている」という現在読みが得られ、非t領域で解釈すると「ポールはスモーカーだ(喫煙の習慣がある)」という習慣読みを得る。また本論文ではこのふたつの領域で解釈される言語情報の質の差も強調されている。t領域を参照する文の表す意味は、局所的時空間で知覚可能な知覚情報であり知覚主体を想定するが、非t領域を参照する文の意味は局所的時空間を超えた知識情報であるとされる。

その上で非時間性説の最大の難点であったhier「昨日」などの時間副詞が現在形と共起しない理由を、文が過去の出来事読みされるためにはある過去の時点 t_1 においてt領域を限定する知覚主体が必要になるが、一方で直示表現であるhierは話し手が発話現在に視点を置く必要があり、このふたつの要請が矛盾するためであると説明している。この分析は現在形と共起しない時間副詞の振る舞いをうまく説明するものであり、現在形の非時間性説を大きく前進させるものである。

本論文が提示する分析で重要なもうひとつの点は、時制の意味解釈と談話主題の関係である。談話主題の重要性はすでにDucrotによって指摘されているが、Ducrotの論考は半過去に関わるものであった。本論文では過去を表す現在形と未来を表す現在形のいずれにおいても、文全体を統括する談話主題が重要な役割を果たすことを示した。hier「昨日」のような時間副詞は過去を表す現在形と共起しないが、文頭に置くと容認度が上がることが知られている。この点も従来の研究では十分に説明されて来なかった点であるが、本論文では、時間副詞が前置されると大きな談話主題として

働き、後続する文はその主題を特徴づける文として非t領域において解釈されるため容認度が上がるのだと説明している。非t領域で解釈されるとは、すなわち知識情報と解釈されるということである。この分析の妥当性は今後さらにDucrotの半過去論や、日本語のテイル形について提案されている統括主題という概念などとの比較検討が必要になるが、過去や未来を表す現在についての従来の研究には見られなかった独創的視点であると言える。

本論文の第3章ではスポーツなどの実況中継で用いられる現在形を取り上げて詳細に分析している。この用法の最大の謎は、形態的に未完了であり時間を前に進めないはずの現在形を用いていながら、実際には次々と起きる出来事を表し時間が進んでいるように見えるという点にある。本論文では中継の現在形はt領域を参照し、かつその領域が知覚が成立する極小の時空間に狭められたものだとしている。そのうえで現在形が解釈されるt領域が話し手の発話の時間軸に類像的に結びつけられることによってあたかも完了的であるかのごとく解釈されると分析している。この分析は妥当なものであり、多くの時間を表す接続詞と共起しないという事実や、逆説のmais「しかし」が用いられないといった事実をよく説明する。また中継の現在形が完了かそれとも未完了かという不毛な論争に終止符を打つものとして大きな価値がある。

従来語りの現在形としてひと括りにされてきた現在形の用法には、実はt領域を参照するものと非t領域を参照するものの2種類があることを説得的に示したこともまた、現在形をめぐる時制研究を前進させるものとして評価できる。

このように本論文は現在形のさまざまな用法を多岐にわたって詳細に分析すると同時に、それらの用法を統一的に説明するための理論装置を提案し、その有効性を説得的に例示している。

このように本論文は、人間・環境学研究科 共生人間学専攻 言語科学講座の博士論文としてふさわしいものであると認定できる。また平成24年12月6日に論文内容とそれに関連した口頭試問を行なった結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降